

入試に活用する大規模記述式テストはいかにして実施されるのか？

—ニュージーランドの事例に学ぶ—

植阪 友理, 福田 茉央 (東京大学)

ニュージーランドでは、日本の大学入試センター試験（大学入学共通テスト）と同様に、全国規模の試験が1年に1度行われており、毎年約14万人が受験している。ニュージーランドにおける大学への進学では、いずれの大学も、筆記による二次試験を実施していない。このため、この全国規模の試験と学校内での評価が主な判断材料となり、進学先の大学が決定される。にもかかわらずこのテストは、ほとんどが記述式で行われている。毎年11月下旬~12月上旬にかけて実施され、1月には結果が各自に返却され、生徒はそれをもとに大学に出願することになる。この試験はどのように実施・採点され、信頼性はどうか保証されているのだろうか。また、なぜこうした仕組みが実現できているのだろうか。文献調査および現地調査を行い、公平性に対する日本における認識との違いなども考慮しながら、これらの問いについて考察した。

キーワード：大学入試、大規模テスト、記述式、ニュージーランド、信頼性、公平性

1 問題と目的

1.1 入試に活用する大規模記述式テストをめぐる議論

近年の大学入試改革の議論は、大きな注目を集めている。特に大学入試センター試験から大学入学共通テストに移行するにあたり、記述式が導入されるという話題は社会の大きな注目を集めた。しかし、現実的には民間業者に委託せざるをえず、採点の質の確保が難しいということや、自己採点と実際の採点との不一致が大きいなど、多くの問題点が指摘され（e.g., 文部科学省, 2020）、最終的には、2020年度からの実施は見送りとなった（文部科学省, 2019）。

ただし、2020年度の大学入学共通テストにおける記述式の導入は見送られたが、新学習指導要領の理念が変更されたわけではない。世界的な動向として、OECDのキーコンピテンシー（e.g., Rychen & Salganik, 2003）や、21世紀型スキル（Griffin & Care, 2012）など、単に問題が解けることを超えた深い理解や、社会とのつながりが議論されるようになってきている。こうした中で、海外で先行して、大学進学に活用されている大規模記述式テストの実例を検証し、現実的にどのように運用しているのかを知ることが意義があるだろう。

日本のように、1年に50万人という規模で受験し、入試に活用するような全国規模の一斉テストを実施している例は他に類をみないが、例えばニュージーランドでは、毎年約14万人が受験する記述式の大規模テストによって、生徒の学力を測り、大学進学にも活用している（External Assessment と呼ばれる）。日本の大学入試センター試験と類似する点もあるが、そ

のほとんどが記述式問題からなっている点で大きく異なっている。ニュージーランドでは、大学ごとの筆記の二次試験はなく、External Assessmentでの成績が、学校内での評価（Internal Assessment と呼ばれる）と並び、大学進学決定に大きな影響を与えている。こうした External Assessment がこの国では一体どのように実施されているのかを知ることは、日本にとっても参考になると考えられる。

1.2 関連する先行研究と本研究における問い

入試にかかわる研究を概観すると、海外の入試事情を取り上げた研究は多く行われている（e.g., 新井・大津・宮埜, 2014; 山形・繁耕, 2014; 渡邊, 2015）。しかし、入試に活用する大規模記述式テストに焦点を当てて海外の事例を紹介した文献は例を見ない。また、記述式テストを取り上げた研究では、自動採点の手法を提案した研究（e.g., 高井・竹谷・森・須鎗, 2018）や信頼性に関する検証（e.g., 宇佐美, 2013）など、定量的な解析が多く、現実の運用に焦点を当てたものは見られない。さらに、ニュージーランドの教育について紹介した文献は散見されるが（e.g., 青木・佐藤, 2014; 七木田・ダンカン, 2015）、教育全体の紹介や、特色がある幼児教育が中心である。ニュージーランドにおいて行われている大規模な記述式テストに焦点を当てた報告や、我が国との相違を考察した報告はこれまで見当たらない。何より、ニュージーランドでは教育改革のスピードが速く、毎年大きな改訂が行われている。そこで、現在行われているニュージーランドの大規模記述式テストについて、概要を捉えた

上で、どのように実施し、信頼性をどう保証しているのか、なぜ日本では不可能であったことがこの国で実施できているのか、その問いに答えることを試みる。

検証方法は、文献調査（web を含む）および実地調査である。以下では、文献（e.g., Hipkins, Johnston, & Sheehan, 2016）および web（e.g., <https://www.nzqa.govt.nz>）から得たものに加え、2020年2月11日から24日までに実施した現地調査で行ったインタビューを踏まえ、本研究の問いを検証する。現地調査では、参考とした文献の著者である NZCER（New Zealand Council for Educational Research）の Dr. Rosemary Hipkins をはじめ、NZQA（New Zealand Qualifications Authority）のメンバーおよび2名の現地の学校教員に対してインタビューを行った。NZQA のメンバーについてはグループ形式で、それ以外は個別に、各約2時間程度のインタビューを行った。その他、4つの学校を訪問し、実際の授業や Internal Assessment の具体についても調査した。

2 ニュージーランドの教育の概要

External Assessment の紹介に先立ち、ニュージーランドの教育の概要について簡単に触れておく。先住民マオリの教育なども含め、様々な形態が認められているが、おおむね Year1 から Year8 までが初等教育、Year9 以降が中等教育である。中等教育はさらに Year9-10 と Year11-13 に大別できる。日本でいう高校に当たるのが Year11-13 である。次節で詳述するが、Year11 から Year13 それぞれの学年において、それぞれの教育目標が十分に達成されているのかが判定される。その達成度評価に関わるのが、NZQA（New Zealand Qualification Authority）が認定する国家資格制度である NCEA（National Certificate of Educational Achievement）である（NCEA は次節で詳述する）。

なお、日本では高校を3年間で卒業することが多いが、ニュージーランドでは必ずしも Year 13 まで在学するわけではない。義務教育終了年齢である16歳を迎えた後は、就学は任意である。Year 12 で社会に出る生徒も多い。

なお、ニュージーランドには、オークランド大学をはじめ全部で8校の大学があり、全て国立である。日本の国立大学における二次試験のように、各大学が行う筆記試験はどの大学においても存在しない。その代わりに、中等教育での達成度評価が進学の条件となっている。NCEA 以外の達成度評価も利用可能であ

るが、多くの学校で NCEA が利用されている。

3 NCEA（National Certificate of Educational Achievement）について

では、大学進学にも利用される、NCEA とはどのようなものなのだろうか。ニュージーランドの中等教育の生徒を主な対象とした学習の到達度を評価し、高校での学習状況を認定するための制度である。3レベルあり、目安としては Year 11 で Level 1、Year 12 で Level 2、Year 13 で Level 3 を取得することを目指す。大学受験の条件である UE（University Entrance）を満たすためには、Level 3 まで取得していることが必須である（UE は後述する）。

NCEA の認定は科目ごとではなく、より詳細な区分である Standards と呼ばれる単位で評価が行われる。ニュージーランドには国が定めた教科書はなく、どのような素材で学習を進めるのかは、学校の教員の裁量に任される。このため、Standards は、日本の単元や領域（例えば、物理であれば、運動、電気と磁気など）とは異なり、能力ベースで構成されている。例えば、物理では、「概念的な理解ができていないか」、もしくは「知識を使って推論ができるか」といったことが Standards として設定される。このように1つの科目が複数の Standards から構成されており（化学では7 Standards、言語では5 Standards など）、試験および評価も Standards ごとに行われる。

なお、Standards には、Achievement Standards (AS) と Unit Standards (US) の2種類が存在し、いわゆる通常の教科学習は、Achievement Standards として評価される。ここでは、Not Achieved（不可）、Achieved（可）、Merit（良）、Excellence（優）の4段階で成績が判定される。一方 Unit Standards では、基本的に合否判定（Not Achieved, Achieved）のみ行われる。Unit Standards は主にホスピタリティやツーリズムなど、職業教育に関連した分野や、コンピューティングのような新しい分野の評価などに利用されている。Unit Standards が設定されている背景には、NCEA が大学進学のための卒業認定を意図しているのみならず、中等教育における職業教育の認定制度としても機能していることが背景にある。

各 Standard にはクレジット（Credits）と呼ばれるポイントのようなものが割り振られており、各 Standard で Achieved 以上の評価を得ると、クレジットを獲得することができるようになっている。クレジットの獲得は NCEA の資格取得につながる。例えば、NCEA Level 1 の資格取得の条件の一つに、Level 1 以上の60クレジットの獲得がある。

2020 EXAMINATION TIMETABLE					
Exams available digitally shown in blue					
Date	Time	Level 1	Level 2	Level 3	Scholarship
Mon 16 Nov	9.30 am	Te Reo Rangatira	Physics	Business Studies	Calculus
	2.00 pm	Chinese	German	Dance	Agricultural & Horticultural Science
Tue 17 Nov	9.30 am	Media Studies	Earth & Space Science	Drama	Chemistry
	2.00 pm		Classical Studies		German
Wed 18 Nov	9.30 am	Agricultural & Horticultural Science	Art History	Statistics	
	2.00 pm	Geography	Spanish	Earth & Space Science	Drama
Thu 19 Nov	9.30 am		Mathematics & Statistics		Biology
	2.00 pm	Music	Accounting	History	French
Fri 20 Nov	9.30 am	Mathematics & Statistics			Classical Studies

図1 2020年の試験の Time Table の一部 (HP より)

3.1 Internal Assessment と External Assessment

NCEA は卒業資格認定と大学への進学試験を兼ね合わせたシステムを取っているため、ここでの評価が大学進学に直結していることになる。NCEA の認定は、Internal Assessment (内部評価) と External Assessment (外部評価) の 2 種類によって行われる。

External Assessment は、前述したように、年一回の試験によって行われる評価である。2020 年の試験の Time Table の一部を図1に示す。報告書によると、2018 年度には、受験者数は 143,962 人 (ただし、日本のセンター試験とは異なり、高校 3 年生にあたる生徒だけの人数ではない。Level 1-3 の受験生に加え、奨学金試験の受験生も含む)、404 の会場、計 129 セッション、採点者は 1,653 名であった。実施にあたり、試験監督等を含めて 5,643 名が動員されている。なお、近年では、External Assessment はオンラインでも実施されている。ただし、オンラインといっても自宅で受けられるわけではない。会場として認められた学校等に来て、鍵の掛かる部屋で、条件を満たしたパソコンを使って受験する。ニュージーランドでは、生徒は日々の授業でパソコンを日常的に利用している。普段の学習環境に近い状況での受験を可能にする工夫の1つとなっている。オンラインでの受験を今後増やしていく予定であるという。

一方、Internal Assessment は年間を通して学校内で教員によって行われる評価である。後述するように、Internal Assessment も External Assessment と対等に大学進学の際に、利用されている。

3.2 External Assessment の実際

では具体的に、どのような試験が実施されているのだろうか。実際に行われた試験内容や解答例、採点例は NZQA の web サイトにおいて全て公開されている。日本の大学入試センター試験はマークシート式であるのに対し、ニュージーランドの External Assessment は、ほぼ全てが記述式問題である。

具体例として、2017 年の化学の Level3 の 1Standard を取り上げる。この Standard の大問 1 (C) では、問題文で第 2 級アルコールの分子式の例 (C₄H₉OH) が紹介され、その上で、「(問1) C₄H₉OH の光学異性体を図に表しなさい」、「(問2) 以下に触れながら光学異性体を説明しなさい。①光学異性体の分子構造の特徴、②どのようにお互いの光学異性体は識別されるか」が出題されている (図2に、Merit 相当の解答例を示す)。

こうした記述式の大問が数題 (2~4 題程度) 出題され、この Standard が評価される。図や文章での説明を求めており、記述式テストであることが見て取れる。テスト時間は 3 時間で、最大 3Standards が含まれる。

では、この Standard はどのように採点されるのだろうか。図 3 に採点例と、その理由が付されたものを示す。

生徒が受験すると、図 3 のような詳細な説明はつかないものの、各 Standard の大問ごとに得点が返却される。大問ごとに Not Achieved(0~2 点)、Achieved(3~4 点)、Merit(5~6 点)、Excellence(7~8 点)の得点がつけられ、全体としても、4 段階の評定のいずれかが付けられる。

採点結果が不服の場合は、1Standardあたり 20.40 ニュージーランドドルで再度採点してもらうことがで

きる。採点に誤りがあった場合には、返金される。家庭の経済状況によっては、費用が免除される。

(c) Some organic compounds can exist as enantiomers (optical isomers).
An example is a secondary alcohol with the molecular formula C_4H_9OH .

(i) Draw the enantiomers of C_4H_9OH in the box below.

(ii) Explain what is meant by the term enantiomers (optical isomers).
In your answer, you should:

- identify the structural requirement for a molecule, such as C_4H_9OH , to exist as enantiomers
- explain how enantiomers can be distinguished from each other.

For C_4H_9OH to exist as an enantiomer, it needs a chiral carbon. A chiral carbon is a carbon that is attached to four different groups. In this case C_4H_9OH can form $-OH, H, CH_2CH_3$ & CH_3 attached to a carbon (C). Enantiomers ~~rotate~~ rotate planes of polarised light ~~that~~ in different/opposite directions that ~~disting~~ can be used to distinguish from each other.

図2 Merit と判定される回答例 (HP より)

Subject:	Chemistry	Standard:	91391	Total score:	15
Q	Grade score	Annotation			
1	M5	The candidate can draw most structures correctly, can follow a reaction scheme and understands optical isomers. Had the candidate eliminated errors with the drawing of structures in Q1(a), (b) or (c) they would have gained an M6 or higher.			
2	M5	Again, errors drawing structures in Q2(a) have prevented a higher grade. Also, the answer to part (b)(i) lacks clarity. The colour change is reversed and there needs to be greater reference to the requirement to separate propanal the moment it is formed to prevent further oxidation to propanoic acid.			
3	M5	Again, errors drawing structures have prevented a higher grade. When drawing functional groups such as NH_2 or OH of the left-hand side of a molecule they need to be drawn as they would connect, e.g. H_2N and HO . Also, the description of condensation polymerisation in part (b) is not clear enough for a higher grade.			

図3 採点結果とその理由 (HP より)

3.3 Internal Assessment の実際

次に、Internal Assessment についても簡単に説明する。近年のニュージーランドでは、キーコンピテンシーが強調され、より生活との結びつきが深い課題の出題が重視されている。NZQA の Web サイトには、新たな評価の実例がふんだんに紹介されている。ここでは、実地調査で授業見学した化学における Internal Assessment を例として示す。この授業は「物質の同定」という単元の一部であり、生徒は物質同定のフローチャートを学んでいた。この授業の Internal Assessment では、液体が入っている瓶を示され、「ここには何か汚染物質が入っている。その汚染物質を特定せよ」が出題されるという。試験中、生徒にはいくつもの試薬が入った箱が渡される。授業では協同で課題に取り組むが、試験では各自が作業を行い、時間内にレポートにまとめる（この試験では、汚染物質を正しく同定できると Achieved、なぜこの試薬がこのように反応したか説明できると Merit、なぜこの試薬を使うと同定できるのかを化学式を使いながら説明できると Excellence と評価されるという）。

授業の終わりに、教員から「次は海や大気の大気汚染について勉強する」と伝えられたところ、生徒たちはわっと「楽しみだ!」と声を上げていた。高校の授業において次の化学の授業が楽しみという声上がる様子は、日本ではあまり考えにくい。学ぶ意欲が引き出されている様子に驚き、教員に問うたところ、「昔とは評価の仕方が随分変わってきている。現実味のある課題を出したり、活動の中で評価したりすることが増えた。こうした授業に切り替えていく中で、生徒の学習意欲も上がっていると感じている」とのことだった。

4 UE(University Entrance)について

4.1 大学進学のために求められること

External Assessment を考えるために、ニュージーランドにおける大学進学の仕事についても触れておこう。ニュージーランドでは、大学進学の最低条件として UE(University Entrance)をクリアする必要がある。UE のためには、NCEA の Level 3 の中でも、Approved Subjects と呼ばれる、UE の資格認定のために含めることができる科目を取得する必要がある。

UE の条件の概要は、以下の通りである。UE を得るためには、①NCEA の Level 3 を取得していること、②Level 3 の3つの Approved Subjects について 14 クレジットずつとっていること、③リテラシーに相当する 10 クレジットをとっていること、④ニューメラシーに相当する 10 クレジットをとっていること

が条件である。大学に進学するには、これに加えて、各大学、各学部に応じた条件が課されることになる。

4.2 具体的な大学受験はどのように行われるのか?

では、Internal Assessment や External Assessment は具体的にどのように進学試験において利用されるのだろうか。オークランド大学の看護学部を例に、ニュージーランドの大学入試の実際を考える。新型コロナウイルス感染拡大を受けて、一部条件が緩和されているようであるが、通常オークランド大学の看護学部に進学を希望する場合、UEに加えて以下3つの条件が求められる。①オークランド大学指定の Level 3 の教科の 1 教科 (e.g., History) で 18 クレジット、② Level 3 の Biology, Chemistry, Physics のうち 1 教科で 18 クレジット、③230 点以上のランクスコア (後述) である。ただし、大学の Web サイトには必ずしも上記の条件を満たしていなくても、進学を希望する場合にはまずは出願してほしいとの注意書きもあり、それほど厳密な基準ではない。

このうちランクスコアとは、Approved Subjects で獲得したクレジットのうち、高評価の 80 クレジットを使って算出される。80 クレジットのうち、Excellence をとったクレジット数に 4 をかけ、Merit をとったクレジット数に 3 をかけ、Achieved をとったクレジット数に 2 をかけ、合計を出したものがランクスコアとなる。ランクスコアの計算は若干ややこしいので、自分が取得した成績を入力すると自動でランクスコアを計算してくれるウェブツールが存在している。計算過程において Internal Assessment と External Assessment は全く対等に扱われる。

4.3 多くの学部で全員入学のニュージーランド

なお、ニュージーランドにおける大学進学には、日本と異なる重要な前提がある。それは多くの学部 (特に人文科学系) において、条件を満たした学生が全て入れる状態にあるということだ。ただし、1 学期でかなり多くの学生が必要な単位を取得できずに退学する。

また、オークランド大学がトップ大学とは認識されているものの、特定の大学に人気が集まるということはない。どちらかといえば、人気大学というよりも、人気学部があると考えた方がニュージーランドの実態に近い。例えば、医学部は人気が高いため、希望者全入というわけではなく、若干の選抜もある。ただし、元々出願要件がかなり厳しいので、応募できる学生そのものが少ない。その中でも選抜が行われる場合には、おそらく External Assessment の結果のようなより

客観的な結果が利用されるのではないかとのことであった。ただし、これらは高校の教員からの情報である。この点は、今後も継続して調査する必要があるだろう。

また、例えばオークランド大学の場合は6つまで希望する学部を書ける。このため、希望すれば、どこかには入れる状況にある。希望学部に入れなくても、違う学部に入って「自分はこれだけできるのだ」という高いパフォーマンスを示せば、希望する学部に移れるルートが存在しているため、大学進学を希望する場合には、ひとまず大学に入ることが一般的であるという。日本のように「浪人」することはほぼない。

5 沸いてくるいくつかの疑問とそれに対する考察

以上が、ニュージーランドの仕組みである。以下では、本論文の主たる関心である、大規模記述式テストに論点を戻し、「誰がどのように採点し、どう信頼性を保証するのか?」、「日本では実現できなかった大規模記述式テストの入試への活用だが、なぜニュージーランドではこうした仕組みを実現できているのか」を、上述した入試制度の特徴も考慮しながら考察する。

5.1 誰がどう採点し、どう信頼性を保証するのか?

文献調査等を行っている中で、最初に疑問として上がったのは、External Assessment は、誰が採点しているのかということであった。この点について確認したところ、「現役の教員が採点する」とのことであった。希望する教員は、事前に登録し、審査を受けた上で、採点官となるという。日本で計画されていたような、大学生を採点官にするということに比べると、ずっと安定した採点結果が得られると考えられる。

教員を採点官にする以外にも、ニュージーランドでは、採点の信頼性を保証するために、いくつかの工夫がある。第1に、一定の信頼性を得るために採点者間一致率を確認し、必要であれば採点し直す。具体的には、全ての採点官（採点統括官を含む）が採点した分量の10%について、別の採点者が評定し、大きなずれがないかをチェックしている。一致率が悪いと、再度評価することが求められ、再び一致率を確認する。

第2に、登録を申請した全ての教員を採点官として採用するわけではなく、日々の Internal Assessment において、国の教育目標を正しく理解し、適切な評価を行っている教員のみを依頼するという工夫を取り入れている。実は、ニュージーランドには、年1回、自分が担当した科目について1クラス分、Internal Assessment の結果をすべて（行ったテスト、すべての解答、それぞれをどう評価したか）を

NZQA に送り、フィードバックを受けるという仕組みがある。NZQA はここでの様子から、採点官がどの程度適切に評価しているかを把握しており、場合によっては希望しても採点官として採用されないこともあるという。

なお、Internal Assessment を NZQA に送ってフィードバックを受けるという仕組みは、External Assessment のために実施されているものではない。むしろ、Internal Assessment の公平性と一貫性を保つため、さらに教員に現在国が目指している教育目標を理解してもらうために実施している。この仕組みを External Assessment にも活用している。

教員が採点しているということに対して驚きの反応を示したところ、NZQA のメンバーからは、「教員に採点してもらうことによって、教員自身に今現在の国家の教育目標を理解してもらう良い機会となる。そのためにも教員に採点をお願いしている」という反応が返ってきた。教員とカリキュラムの目標について共通理解を形成することが、ニュージーランドで大変重視されており、Moderation Process と呼ばれている（e.g., Hipkins, et al., 2016）。上述した NZQA による Internal Assessment のチェックはそうした目的のもとで行われている。大規模記述式テストの採点も、こうした目的のために利用されているのである。

第3に、それでも生じてしまう問題に対しては、生徒自身から指摘してもらう、というスタンスを取る。採点基準や採点例を全面的に公開し、納得できない場合には、家庭の経済状況によらずに、再評定を要請できる仕組みを採用している。

5.2 なぜこうした仕組みを実現できているのか?

最後は、日本では実現しなかった大規模記述式テストが、なぜニュージーランドでは実現できているのかその疑問について、公平性に関する考え方の違いにも触れながら考えてみたい。

まず、基本的な前提として、大学進学に対する社会全体の考え方が異なっている。日本では、大学進学と将来的な就職とが強く結びついている。誤解を恐れずにいえば、良い大学に進学することが、良い就職につながるという認識が社会に少なからず存在する。一方、ニュージーランドでは、大学に行かなくても就職でき、一定水準の生活を送ることができるため、大学に進学したいという意識が元々そこまで強くない。このため、前述したように、全入の学部も少なくない。両国では大学入試へのこだわりには大きな違いが見られる。

また、日本と大きな違いが見られるのが、公平性に

対する感覚である。Moderation Process に代表されるように、教員が国家の教育目標を正しく理解し、全国的に統一された基準で Internal Assessment が行われることを目指すなど、ニュージーランドでは公平性を追究し、国の仕組みとしてそれを保証する仕組みを整えている。また、採点者間一致率を算出し、それが低い場合には採点をやり直すなど、高い信頼性を保証するための工夫を導入している。

その一方で、日本のように、入試当日に出されたある 1 問の採点が、1 点単位で一致していることを公平性と捉え、どこまでもそれを追求するという発想ややり方は取らない。記述式である以上、どうしても、採点が 1 点単位で確実に一致することはあり得ないが、それでも「公平」と捉え、許容する背景には、入試制度の違いが存在する。External Assessment では確かに、Not Achieved の 0 点から Excellence の 8 点まで、大問ごとに得点が計算される。その一方で、最終的にはその結果は、合計され、Not Achieved, Achieved, Merit, Excellence という 4 段階の評価にまとめられる。大学進学にあつてはこの 4 段階の評価がランクスコア等の計算に反映される。つまり、日本の入試とは異なり、1 点を競うような仕組みとはなっておらず、所定のクレジット数を取っていれば、等しく大学に進学できる。このため、公平であるということの捉え方が、日本から見ると少しゆるやかに捉えられているように感じられるのではないかと考えた。

最後に、教育改革の速さについても述べておきたい。ニュージーランドの教育改革の速度は驚くほど速い。毎年レビューが出てどんどん見直される。ある教員は、人口の少なさがゆえに、「ニュージーランドは小舟、日本は大型船に例えられる」と述べていた。教育改革のスピードが速い背景の 1 つには、上述した国の規模の違いに加え、(もちろんある程度の議論は行った上であるが) 長い時間をかけて議論し続けるよりも、ひとまず良いと考えられる仕組みをつくりあげ、順次それを改善していくという発想が強いことが挙げられる。

また、教育改革の議論のあり方も影響しているだろう。ニュージーランドでは、いずれの政党も国民と共に教育をつくるという感覚が強いという。教育改革にあたり、始めに実現されるか否かが確定ではない案が国から示され、パブリックコメントが集められる。賛否はあれど、総論として賛成の方が多くなると、より現実的な案が公表される。再びパブリックコメントを求め、一旦実現させる。実施されてからも、現場の教員が多く参加する委員会によってレビューされ、毎年どんどん変わっていく。そうした政治の姿勢や、教

育改革の手続きも、教育改革がスピード感をもって実現している背景にはある可能性が考えられる。

本研究は、ニュージーランドの大学進学で利用している大規模記述式テストを取り上げ、どう実施されているのかや、日本ではできなかったことがなぜ実現しているのかを考察した。社会における発想の違い等があるため、日本ですぐに実現するという類のものではないが、今後の日本での議論の一助となることを望む。

注

1) 本原稿は、東京大学高大接続研究開発センター内での発表をまとめた報告書に、加筆修正を行ったものである。

謝辞

インタビューに応じてくださった Dr. Rosemary Hipkins, NZQA のみなさん、教員のみなさん、訪問を受け入れてくれた学校現場に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 青木麻衣子・佐藤博志 (2014). 『オーストラリア・ニュージーランドの教育』 東信堂
- 新井清佳・大津起夫・宮埜寿夫 (2014) 「中国の大学入試試験 (数学) とセンター試験 (数学) の比較」 『大学入試研究ジャーナル』 **24**, 121-126.
- Griffin, P., & Care, E. (Eds.) (2012). *Assessment and teaching of 21st century skills. Methods and Approach*. Springer.
- Hipkins, R., Johnston, M., & Sheehan, M. (2016). *NCEA in Context*. NZCER Press.
- 文部科学省 (2020 年 2 月 7 日). 「記述式問題導入のための検討において指摘された課題 (概要)」 文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/20200207-mxt_daigaku02-0000045_65_11.pdf (2020 年 7 月 21 日).
- 文部科学省 (2019 年 12 月 17 日). 「萩生田文部科学大臣の閣議後記者会見における冒頭発言」 文部科学省 https://www.mext.go.jp/content/20191217-mxt_kouhou01-000003280_2.pdf (2020 年 7 月 21 日).
- 七木田敦・ジュディス ダンカン (2015). 『「子育て先進国」ニュージーランドの保育』 福村出版
- Rychen, D. S., & Salganik, L. H. (Eds.). (2003). *Key competencies for a successful life and a well-functioning society*. Hogrefe & Huber Publishers.
- 高井浩平・竹谷謙吾・森康久仁・須鎗弘樹 (2018) 「シーケンスアライメントを用いた記述式問題の採点支援システムの提案」 人工知能学会全国大会論文集, **32**. 2L405.
- 宇佐美慧 (2013) 「論述式テストを通じた評価と選抜の信頼性に関わる諸要因の影響力についての定量的比較検討」 日本教

育工学会論文誌, **36**(4), 451-464.

渡邊雅子 (2015) 「大学入試でテストされる能力のタイポロジー：アメリカ, 日本, イラン, フランスの大学入試問題比較から」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **62**, 1-17.

山形伸二・繁栞算男 (2014) 「米国の競争性の高い大学における入学者選抜」『大学入試研究ジャーナル』 **24**, 97-104.